

12 節. 「イエスは、『さあ、来て、朝の食事をしなさい』と言われた。弟子たちはだれも、『あなたはどなたですか』と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。」

復活の主イエスが食事を用意し、漁（伝道）に出て帰って来た弟子たちを食事の席（食卓）へ招く。教会で行う聖餐は、このように主イエスが準備し招く主の食卓である。

「あなたはどなたですか」。1 章 38 節で二人の弟子が「ラビ、どこに泊まっておられるのですか」と問うたのと同じ。またこの問いは 8 章 25 節の「あなたは、いったい、どなたですか」という問いにもつながる。ヨハネによる福音書は、この問いに答える形で書いている。主イエスこそ神の独り子、メシア（救い主）であると。

「主であることを知っていた」。この場合は「主」は、復活の主であり、メシア、キリストとしての「主」である。弟子たちは、神的な威厳と栄光をもって立っておられる主イエスの前で畏怖の中で言葉を失い「あなたはどなたですか」と問うことができない。いや問う必要がなくなったのであろう。

13 節. 「イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。」

「イエスが来て」。復活の主イエスが食卓に来られ、弟子たちにパンと魚を与えられる。自分たちは復活の主イエスが用意してくださった食事を主と共にしているのだという初代教会の体験が、この言葉の背後にあると思われる。

弟子たちは、主イエスが復活されたことを宣べ伝える時、自分たちが復活の主イエスと食事を共にしたことを、重要な根拠として挙げている（使徒 10:40-41）

「6 章 11 節には、『パンを取り、与える、魚も同様に』という同じ表現がある。すなわちこの食事はイエスの与える主の食事であり、弟子たちはそれを受けるのである。エマオへ向かう二人の弟子たちの場合は、この時彼らの目が開かれる（ルカ 20:30-31）。食事によって共同体の成立が示唆され、明らかに聖餐への示唆であると考えられる。そしてその主がパンと魚を与える復活したイエスなのである。」（伊吹）

14 節. 「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。」

「三度目」とは、20 章の「週の初めの日」に二度現れたことを含む。復活の主イエスが自分たちに現れたという体験が、弟子たちのその後の福音宣教の起点となる。

15 節。「食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがお存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。」

この 15 節以下はペトロを牧者として立てる記事である。任職に当たって復活の主イエスは「ヨハネの子シモン」と呼びかける。ペトロをこのように呼ぶのは 1 章 42 節以来（マタイ 16:17 参照）。ここでペトロに求められているのは復活の主、ペトロを牧者に任職する主イエスへの愛である。

「この人たち以上に」。愛は他人と比較するものではない。でもこの言葉を通して言おうとしていることは明瞭であろう。

「ここでペトロは最高の牧職を委ねられるのであり、その第一の条件は誰よりも主を愛することなのである。……。牧職の条件として何よりも、主への愛が要求され、他のことには言及されない。この牧職の権威はこの愛のみ基礎づけられる。それは愛の権威である。愛のうちに信仰は含まれているのである。……。このイエスの言葉は突然で一方向的とも言えるものでペトロは当然困惑する。ペトロはしたがって『はい、わたしがあなたを愛していることをあなたは知っています』と答える。すなわち誰がどれほど愛しているかなどは、主の知るところのみなのである。もちろん、この人たち以上に、というような言葉はない。それはペトロの知るところではないからである。この愛だけが牧することの資格なのである。愛の他には何も言われていない。またこの愛は 13 章 34 節では、互いの愛であり、14 章 15、21 節では、この掟を守る者が主を愛する者なのである。互いに愛することが羊の群れ、すなわち教会の成立を意味しているのである。ここでは何かの権限を与えるという話ではない。権限は 20 章 23 節ですべての弟子たちに与えられた。イエスは『わたしの小羊を飼いなさい』という。イエスはすべての者を自分の小羊と呼んでいる。ここにイエスの愛が表れている。ペトロは牧職を委託されたのである。イエスが真の牧者である（10:11, 14、ヘブライ 13:20、1 ペトロ 5:4）」（伊吹）

ペトロは最後の晩餐の席で、「あなたのためなら命を捨てます」と決意した（13:37）。ところがそのすぐ後で、そのような人は知らないとして 3 度も主イエスを否認する（18:15 以下）。自分の決意とか勇気が何の役にも立たないことを思い知ったペトロは、ここでは自分の思いを言い立てることはせず、「わたしがあなたを愛していることは、あなたがお存じです」と、主イエスの側の理解と自分への扱いに委ねる。この姿勢は、主イエスと自分の関わりの根拠を自分の側に求めず、ただ主イエスの側に委ねる姿勢を示している。ペトロの主イエスとの関わり方は、3 度の否認と顕現体験を境として 180 度転換している。

16 節. 「二度目にイエスは言われた。『ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。』ペトロが、『はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです』と言うと、イエスは、『わたしの羊の世話をしなさい』と言われた。」

「わたしを愛しているか」という質問を主イエスは3度ペトロにするが、最初と2回目は (ἀγαπάω、アガパオー) が、3回目は (φιλέω、ピレオー) が用いられている。学者たちは、この両者は厳密に区別されないで用いられているとみてよいという。また、主イエスの問いに対するペトロの「わたしがあなたを愛していることは」の「愛している」は、3回とも、身近な者への情愛を示すフィレオー (φιλέω) が用いられているが、これもアガパオーとの違いをあえて強調する必要はない、と言っている。

17 節. 「三度目にイエスは言われた。『ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。』ペトロは、イエスが三度目も、『わたしを愛しているか』と言われたので、悲しくなった。そして言った。『主よ、あなたは何かかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。』イエスは言われた。『わたしの羊を飼いなさい。』」

主イエスの問いかけとペトロの答えは3度繰り返される。この「三度」は、ペトロが3度も主イエスを否認したことに対応していると思われる。主イエスは、3度までも否認したペトロに、同じ回数だけ御自身への愛を告白させることを通してペトロを立ち直らせ、御自分の羊の群れ(信仰共同体、教会)の指導(世話)を委ねる。

3度の繰り返しは、その動作とか事柄が徹底的になされたことを象徴している。

18 節. 「はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」

18, 19 節はペトロの殉教の予告である。

「はっきり言うておく」 (ἀμήν ἀμήν λέγω σοι、アーメン、アーメン、レゴー ソイ) (直訳「まことに、まことに、わたしはあなたにいう」)

「19 節の説明によれば明らかにペトロの殉教についての言葉である。それは牧職と献身の関係性を明らかにする。イエスは良き牧者であり、良き牧者は羊のために命を捨てる。ペトロの死はこのことを意味しているのであり、『より多く愛する』とはこの命を捨てる牧者としての愛を意味するのである。『若かった時』に対し『年をとると』が、『自分で帯をしめ』に対し『あなたを帯で締め』が、『欲するところ』に対し『欲しないところ』が対置されている。『両手を広げる』とは十字架刑なの

か、・・・・・・いずれにしても殉教のことが言われており、イエスが言うということとは単なる預言ではなく、イエスがその際助けることが確約されていると解さなくてはならない。そしてこれは既に述べたように 10 章の良き牧者のごとく羊のために命を捨てることと解される (10:11) 」 (伊吹)

19 節. 「ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、『わたしに従いなさい』と言われた。」

ヨハネによる福音書は、主イエスの十字架の死は、子が神の栄光を現す出来事としている (13:32、17:1 など)。ペトロもその殉教の死によって神の栄光を現すようになると言われている。

「どのような死に方で」死ぬ、ということは 12:33、18:32 では主イエスについて言われている。また「示す」も 12:33、18:32 と全く同じである。

「ここでは『死ぬ』の代わりに『神の栄光を現すだろう』と書かれている。死は神の栄光を現すことなのである。」 (伊吹)

ここでの「わたしに従いなさい」は、最初に弟子として召された時の言葉 (マルコ 1:17 等) とは違って、主イエスは既に十字架の死を遂げている。その主イエスが「わたしに従いなさい」と言われる時、それは主イエスと同じく神の栄光のために命をささげる覚悟を求めておられることになる。